

どうかんきょう

真宗大谷派同和関係寺院協議会

2021年6月30日発行

同関協だより 第62号



現在の柳原銀行記念資料館

柳原銀行記念資料館より

主な内容

- P 2 崇仁まちづくりと京都市立芸術大学移転 - 後編 -
柳原銀行記念資料館事務局長 山内政夫 さん
- P 5 会員の声
- P 6 対談「是施陀羅」問題に向き合う 青木玲さん
- P 10 気になる1冊
- P 11 追悼 泉恵機さんをお偲びして



真宗大谷派
同和関係寺院協議会

私たちは 教団内外における部落差別の克服を願いとし
差別に苦しむものが一人でもいる限り その差別からの解放を自らの課題とする

「同関協」規程前文

ご意見・ご感想募集

『同関協だより』編集委員会では、より良い紙面づくりのため、皆様のご意見・ご感想を募集しています。

QRコードをスマートフォン、もしくはパソコンで読み取っていただければ、ご意見・ご感想の受付サイトへ行くことができます。

受付期間は次号発行日までです。

QRコードが読めない方は、次のアドレスを直接ご入力ください。



<https://forms.gle/uY8U4LfAHigiNQWx8>

会費納入のお願い

(年会費5,000円)



〔口座番号〕(ゆうちょ) 01010-6-2770

ドウワカンケイジンキョウギカイ

〔口座名〕 同和関係寺院協議会

同関協だより 第62号

発行日 2021年6月30日 発行人 松尾英城

発行 真宗大谷派同和関係寺院協議会 真宗大谷派解放運動推進本部内「同関協」事務局
〒600-8164 京都市下京区上柳町199 ☎ 075・371・9247

編集後記

二〇二一年二月二十六日、小森龍邦さん(部落解放同盟広島県連顧問)が八十八歳で命終されました。二〇一六年度「同関協」現地研修会で小森さんからご講義をいただいたことを今も鮮明に記憶しておりますが、あれから私自身本当に「是施陀羅」問題に向き合い続けてきたのかを、改めて自らに問いかけられる出来事でした。謹んで哀悼の意を表します▼
六十一号に続き山内政夫さんに「崇仁まちづくりと京都市立芸術大学移転」後編を寄稿していただきました。柳原銀行がかつて地域の下支えとなる重要な役割を果たしてきた歴史や、東西本願寺と崇仁地区の住民との密接な関係性、京都市立芸術大学の移転の経緯や今後の京都駅東部地区の新しいまちづくりの展望など、私たちが知らなかった崇仁地区の活動が分かる内容です。ご一読ください▼
新型コロナウイルスの感染拡大が始まって、もう一年以上経ちました。一般社会と同じように教区の会議や研修もWebで行われるようになりました。またマスクを着用しての儀式的執行など、今までは考えられなかったことも、すっかり当たり前のことになりました。「コロナ禍」という言葉も毎日どこかで目にしたり、聞いたりします。でも私は最初コロナ禍の「禍」の字の意味を知りませんでした。調べると「禍」は(わざわい)という意味を持つ字でした。「災い」(わざわい)との違いは、「災い」は防ぎようのない天災、「禍」は人々の努力や工夫によって防ぐことができた事象や被害。そう思うと、新型コロナウイルスの感染拡大の状況は、私たちの努力や工夫できつと抑え込める「わざわい」だと言えると共に、コロナによって起こされる差別も、私たち一人ひとりが正しい情報や知識を持つことで、防ぐことが出来ると思います。

小幡智博



展示室の様子(柳原銀行記念資料館)

柳原銀行記念資料館より

みこみ、崇仁地区の先祖が山水河原者と呼ばれた「日本庭園に関わった芸術家」であったと位置づけ、芸大移転にエールをおくった。

崇仁のまちづくりは、これまでの「同和対策事業」の延長ではなく、京都駅東部地区全体を視野に入れて着手した。その動きの中で崇仁地区にまちづくりの核となる大型施設を誘致することが決定され、京都市と協議する場が持たれた。大型ホテルの誘致や自治体の出先機関、なかには京都市庁舎を移転させる等の意見も出された。しかし、京都駅の北も南も西も商業施設やビルが立ち並ぶ今、その方向ではなく、崇仁地区の高瀬川を中心とする自然豊かな環境を活かし、「京都市立

崇仁まちづくりと京都市立芸術大学移転

- 後編 -

柳原銀行記念資料館 事務局長 山内 政夫 さん

柳原銀行記念資料館 <http://suujin.org/yanagihara/>

3 「柳原銀行本社屋」保存運動と「崇仁まちづくり推進委員会」

かつて河原町塩小路の西南角にあった古ぼけて煤けた西洋館が、被差別部落の住民によつて設立された唯一の金融機関である「柳原銀行本社屋」の建物であったことは、あまり知られていない。被差別部落である崇仁地区に明治の半ば頃、銀行組織が誕生した。京都部落史研究所の資料にもとづく調査の中で、約二十年もの間、当時の住民が自らの経済力で地元の経済を支え、差別の解消を志してきたことが明らかになった。一八九八(明治三十一年)年十二月二十六日に紀伊郡柳原町(後の崇仁地区)の明石民蔵ら十一名が、合資会社柳原銀行の設立認可を大蔵省に出願し、翌年に認可された。地元の学校建築の積み立て講と真宗寺院七カ寺、地元有力者が出資し、一九〇七(明治四十一年)年に現在地に社屋が建造された。

柳原銀行は、いわばコミュニティバンクの性格を持ち、初代頭取明石民蔵の言葉を借りれば「世の進軍におくれず、外には旧来の陋習を打ち破り世の「新平民の」の価値を高め、差別解放を目指す」と、自らの力で解放をなす

と世に宣言した。また、地域的に古くから皮革産業への関わりが強く、商売を生業としてきた住民が多いことから、柳原銀行が地域の下支えとなる重要な役割を果たしてきたことが伺える。

地元の人々は、自分たちに先駆け解放運動の先鋒をきつた約百年前の先達の言葉に励まされ、その建造物の歴史的、文化的価値を再評価していった。一九八九(平成元)年四月には「柳原銀行」保存のためのシンポジウムを開催し、その後、建物保存のための署名活動や基金をつのり、一九九四(平成六)年に「京都市登録有形文化財」となった。

そして、建物を移築、復元することとなり、一九九七(平成九)年十一月に「柳原銀行記念資料館」としてオープンした。現在に至るまで、部落史や崇仁地区の文化を伝える大切なコミュニティの中心として、京都市による啓発事業、特別展を三十二回、企画展を十回、各種シンポジウム、また崇仁地区に関わる資料の収集、研究に寄与し部落問題や人権問題の方向性を描くのに大きく貢献してきた。中でも、柳原銀行記念資料館二十周年特別展(二〇一七年)「我ら、山水河原者の末裔なり」芸大移転に寄せて」では、古文書を読

芸術大学」を誘致する方向性を固めた。

これらのまちづくりの下地には「崇仁まちづくり推進委員会」や「柳原銀行記念資料館」での成功経験があった。地域の活性化には、地域の歴史を紐解き、地域が一丸となれるポイントを探することが重要である。一致点を深掘りする努力を絶え間なく行うことが、成功へのヒントである。

一致点の一つは高瀬川である。北から順に銅駝学区、立誠学区、永松学区、菊浜学区、崇仁学区、東九条へと流れている。現在はその流れに高瀬川保勝会が存在し、高瀬川を中心とした自然豊かなまちづくりが取り組まれている。二〇一六年に菊浜高瀬川保勝会、二〇一七年に崇仁高瀬川保勝会、二〇一八年に東九条高瀬川保勝会が誕生し、高瀬川を中心に地域がつながり、新たな文化や歴史が誕生している。このようにして京都市内を流れる高瀬川流域の各地域に保勝会ができて、その自然環境は守られている。これもまちづくりの一環である。

もう一つの一致点は、東西両本願寺をはじめとする真宗の寺院・道場である。近隣には、江戸時代に東西両本願寺の「寺内町」であった

地域がある。また崇仁地区には江戸時代、六条村があった。この村名はもともと六条河原に所在したこと由来する。六条村がまだ六条河原にあった一六七四(延宝二)年に、鴨川の氾濫による大水害によって壊滅的な被害に遭っている。その翌年に真宗の道場が建てられており、この道場を中心に地域が復興されていったとみられる。

また東西両本願寺が火災にみまわれた時には、六条村などの人々が火消しに駆け付けており、本願寺を支える重要な役割を担っていた。崇仁地区寺院調査の時(前号参照)には、「寺内町」の人々が崇仁地区の住民と同じまちづくりに汗をかいているいくつかの資料を発見している。差別する側だと思ってきた「寺内町」の住民とも関係を築き、ともに東西両本願寺を支えてきたことが伺い知れる。

4 京都芸術大学を核とするエリアマネジメント

二〇一三(平成二十五)年、門川京都市長は地元との協議を踏まえて、二〇二三(令和五)年に「京都市立芸術大学」を崇仁地区に移

Member's Voices

会員の声

みいけ まゆみ
九州教区 三池 眞弓 さん

「現生不退」 親鸞思想に信心の社会性を学ぶ

長く教師修練に関わらせていただいておりますが、特に前期修練では部落差別問題を取り上げ、部落差別を自らの課題として考えてもらうべく、ともに自己を見つめる時間を大切にしています。

しかしながら、私自身が教師修練を受けていた時も、またスタッフとして修練に関わり始めた頃も、なぜ修練で部落差別問題を学ぶのか、部落差別問題が信心の課題とどのように関係しているのか分からないでいました。

それは、「私は差別者ではない」という自負があったからかもしれませんし、「寝た子を起すな」という思いだったからかもしれません。また、「私一人が考えても差別はなくならない」と思っていたからかもしれません。その思いが、いかにご本願に反き、仏智を疑う心であるかということを知らせても、今も繰り返し繰り返しその思いと対峙する日々です。

そんな私でしたが、一昨年、全身をあげて自らのいたみを語ってくださった修練スタッフの姿に導かれ、「同関協」の会員になりました。

修練では毎回事前に研修会が開催されますが、2018年の前期修練に向けての事前研修会には、小森龍邦さんがご出講くださいました。

世の中の不条理と軋轢に目を背けることなく向き合い続けられながら、問題を対象化せず、自らの課題とされた小森さんの毅然としたお姿に触れ、日常の関係性の中であぶりだされる私の中にある保身の心と差別心が問われたことでした。

『「現生不退」親鸞思想に信心の社会性を学ぶ』—この言葉は修練道場にのこしていただいた小森さんの言葉です。

「信心の社会性」という言葉に、生活の中で日々迫られる選り取り決断に責任を持つこと、その具体的な歩みの中に、本願念仏の教えに照らされている人間の姿を思います。

小森さんの2月26日の訃報に触れ、私も小森さんの願われた世界を願い、生きていきたいと思うのです。

転すると発表した。地元でも各種の集会や会議を重ね、様々な意見がある中、粘り強く説得を行い、市長の発表時にはほぼ住民の合意に達した。少子高齢化により、かつての活力が失われて行く中、若い人々が地域に移り住み、地域の支える力となってくれるよう希望を抱く。

芸大の崇仁地区への移転が決定して、地元は慌ただしい日々を送ることになった。崇仁小学校校舎の解体、市営住宅の建替、自治連合会の建物の移転、柳原銀行記念資料館の倉庫解体など、確実に移転の工事が進んでいる。昨年には改良住宅の建替が完了し、小学校が完全に姿を消した。芸大の新校舎が姿をあらわすことは、いよいよ現実になろうとしている。しかし同時に、懐かしい風景が消える喪失感が漂ってもある。今まさに歴史的な転換点をむかえている。

我々が目指すのは単なる一地区のまちづくりではない。私は、「京都駅東部エリアマネジメント」に、誤解や偏見によって相手を見つめてきたこれまでの社会を乗り越えようとする可能性を見出している。京都市内にはいくつものエリアマネジメント組織があり、ここ京都駅東部も将来を見据えて、独自のエリア

「崇仁まちづくりと京都市立芸術大学移転」前・後編を終えて

今、崇仁地区への芸大移転をきっかけに京都駅前の風景が大きく変わろうとしています。そこで、東本願寺にほど近い崇仁地区と東本願寺との関わりや、歴史的な背景をあらためて見つめ直す機会として、山内政夫さんにご執筆いただきました。

多くの場合、同和対策事業や都市開発により、古くからある地域の風景が消え去り、そこに住む人々の伝統や文化も失われていきます。そのような中、崇仁地区では、歴史文化の伝承と新たなまちづくりの取り組みを両立させる住民運動がなされています。

また崇仁地区の人々は、代々、本願寺を護持してきた自負を持ち、同地区と東西本願寺の相依の関係性をうかがい知ることができました。

山内さんには、お忙しい中、丁寧なご説明と地元愛にあふれる熱い思いの伝わる原稿をご執筆いただき、誠に有難うございました。

(編集委員 治田裕臣)

マネジメントを目指しているが、今はまだそれぞれの学区が課題を見つめて提案する時にある。今、芸大は西山(京都市西京区)にあり、本格的にエリアマネジメントには参加していない。その舞台は我々地元が用意する。まちづくりとは建物が建つというものではなく、人々の意識や考えが変わるところから始まる。やがて芸大の姿が見え始めると、人々の動きはさらに活発になる。その時、芸大と同様に、東西両本願寺が地域の主人公となることを期待したい。東西両本願寺が、「京都駅東部エリア」の地域の人々の拠り所として、また教えを通して、そこに暮らす人々とともに今後歩んでいくことを願っている。(了)



高瀬川を利用してつくられたビオトープ
柳原銀行記念資料館より

「是旃陀羅」問題に向き合う

対談

九州大谷短期大学 准教授 **青木 玲さん**

×

『同関協だより』編集委員 **浜口 和也**

「是旃陀羅」問題に向き合う姿勢をたずねて、九州大谷短期大学の青木玲さんに、
浜口編集委員がお話を伺いました。

当初、対面で対談を行う予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の状況を受
けてウェブでの対談になりました。

対談は2時間に及びましたが、ここではその一部を掲載します。

浜口 本日は、「是旃陀羅」問題に
向き合う」というテーマで、教学の
観点からこの問題について発表をさ
れている青木玲さんと、対談をさせ
ていただきます。よろしく願いま
す。

青木 よろしく願います。

浜口 早速ですが、「是旃陀羅」の問
題をみていく中でよく言われるの
が、全然現場の中で共有されない、
教師修練などで、この問題が切実な
問題になっていかない、「是旃陀羅」
という言葉自体が、どういう意味か
分からないという人たちが大谷派
教師の中にいて、学習の場でも広が
ていかない。ひどい場合には「まだそ
んなことをやっているのか？」と、そ
ういう意見もあります。

「そんなことやるより、もっと他に
やることあるやろ」という意見も
あったりします。あるいは、「部落解
放同盟に言われたから取り組むって
いうのは、いかななものか？」と、そ
ういう話もあったりします。そのよ

うな中で、なぜ「是旃陀羅」について
発表しようと思ったのですか？

青木 「是旃陀羅」の問題だけでは
ありませんが、差別問題について、学
校をはじめ、教師修練の現場などで
学んでいます。なかなか自分自身
の問題にならないと感じていま
す。私自身がそうでした。

ですから、「是旃陀羅」問題も自分
から積極的にかかわったというよ
り、部落解放同盟広島県連合会から
指摘していただいたことがきっかけ
でかわるようになりました。その
中で「是旃陀羅」について考えるよ
うになり、発表したのが最初です。

これまで、差別問題は浄土真宗の
教えを学ぶ人がついでに学ぶことだ
と思っていました。しかし、そうでは
なく、人間の問題なんだろうと思
い、そこから少しずつ考えるようにな
りました。ですから、この「是旃陀
羅」問題をきっかけに、自分の中で差
別問題についての視点が変わったと
思っています。今まで修練などで、な
ぜ差別問題を学ぶのかということ

が全然はつきりしていませんでし
た。

浜口 自分も修練を受講していた
頃を思い返したら、あやふやという
か、まじめに取り組んでいなかった
という思いです。改めて、修練にス
タッフとしてかわらせてもらうよ
うになって、特に若い修練生からは
「部落差別」という言葉自体を知ら
ないという声を聞きます。自分たち
の同年代でも、北陸や北海道の方だ
と部落差別の問題を学校で学習す
る機会が無いようで、全国的な問題
にもかかわらず、学習の度合いにす
ごくばらつきがあると感じていま
す。大谷派の中でも修練がころうじ
てその場であるけれど、修練四日目
の課題別講義が終われば『部落問題
学習資料集』を開くこともなく、な
ぜこれが問題になるのかということ
自体に触れられる機会がなくなっ
てしまっています。

一方で、九州の修練生の中には、小
学生から学習の場がありましたとい
う話を聞くと、ほんと地域差があ

るんですよ。その地域差をどう埋
めていくのかというのが、今後の課
題にもなっていくと思います。

そして、「是旃陀羅」の話をする
と、「この一語を読むのか読まない
のか、削除するのかしないのか」と
いうことにスポットが当たる傾向が
あって、なぜ経典にこの言葉がある
のか、とか、なぜ問題提起されてい
るのかということが、問題にならな
いんです。

青木 実際、読誦するかしないかと
いうことが言われていますが、そも
そも『観無量寿経』（以下、『観経』）は
どれくらい読誦されているのでしょ
うか？

浜口 中には、「うちは『観経』を読
まないから関係ない」という人もい
ますね。

青木 そういう意見もあるでしょ
うね。

浜口 二〇一三年に部落解放同盟

広島県連合会から、真宗大谷派、浄
土真宗本願寺派に対して、この「是
旃陀羅」について改めて問題提起が
ありました。そして、二〇一七年に
聞如上人の二十五回忌がありまし
た。その時に、御影堂で『観経』が勤
まりましたが、『観経』に対する説明
はなかったですね。本山での読経は
速いですが、「是旃陀羅」という言
葉が聞き取れるわけではないです
が、そういうところにこの問題の根
深さというか、問題化していかない
現状があるのではないかと思います。
す。びっくりしたのは、外陣でお勤め
をする方の中に「是旃陀羅」自体を
知らないという声があったのです。
『観経』が読めても、そこに書かれて
いる言葉一つが問題になってこない。

そういうところが、「御経は読める
けど説教はできない」と言われたり
するとところに繋がっていくと思い
ますし、自分たちの日常の生活意識と
いうところにも変化が生まれな
いわけです。これは米田富さんが言っ
ているとおり、「生活が変わらなけ
れば、どれだけ説教しても、説教だ

けで片付くのであれば明治百年とつ
くの昔に片付いている」という言葉
に象徴されるのでしょうか。だから
「共有」という言葉がとても難しく
感じます。

青木 「是旃陀羅」を知らないとい
うことは、読誦の課題もはつきりし
ないということですかね。

浜口 そうです。「なんでそんなこ
と問題にするの？」ということど
しょうか。

青木 それはお釈迦様が説かれた
ものを、なぜ問題にするのかという
ことでしょうか。

浜口 部落解放同盟広島県連合会
の指摘は、御経の絶対視ということ
を問題にしている、「旃陀羅」の救い
はどこに書かれているのか、「下品下
生」までが救われていく道は書かれ
ているけれど、肝心の「旃陀羅」は
「是旃陀羅」という言葉で貶められ
たままじゃないかと。「旃陀羅」と蔑

まれてきた人たちも等しく救われていくということが書かれていないと、やはり經典としては不十分ではないのかということです。それについては答えようがありません。「施陀羅」の救いが一体どこに書かれているのかというと、それは「下品下生」のところでしか当てはまらない。はっきりと「施陀羅」が救われていくとは、書かれていないという指摘です。

青木 「施陀羅」という階級は、どこまで行っても人間が作り出してきた枠組みですよ。そのことと、『観経』に説かれている「九品」ということが重なるような内容かどうか、そこは一つ課題かと思っています。

善導大師の『観経』の解説書（『観経四帖疏』）を見ると、「是施陀羅」の解説に似た文章が「九品」の解説の中に出てきます。ですから、人間が作ってきた枠組みと、御経に説かれている人間のありさまがどうかかわっているか。この点が難しいと思っています。

例えば、「屠沽の下類」という言葉

ようとした何かヒントが見られるんじゃないかと思っています。

浜口 なるほど、別々で表現されることはないということですね。

青木 そうです。必ずセットで表現されます。「煩惱」に縛られた「われら」ということが最初にありますので……。『われら』を親鸞聖人が用いる時は、「煩惱具足のわれら」とか、そういう視点しかありませんので、その一点は外せないと思います。

今のところ、親鸞聖人の『観経』『阿弥陀経』の注釈書については、論文に書いた以上のことは見いだせていないですし、「具縛の凡愚・屠沽の下類」も、どういう視点でと考えているかが、考察がなかなか展開していきません。ただ、先ほど言いましたように、親鸞聖人は「具縛の凡愚・屠沽の下類」とセットで表現しますので、「屠沽の下類」というところだけに注目されている

があります。「屠沽」を「下類」と言っているのは、その当時、人間が作り出した枠組みでしょう。だから、人間が作り出した差別です。その差別された存在の救いがどこで見えていけるか。確かに「施陀羅」が救われていないじゃないか、ということはあると思います。では、「平等」といったらいいのか、親鸞聖人の言葉で言ったら、「われら」といったらいいのか、そういうことがどこで成り立つか。それを明らかにしているのが『観経』ではないでしょうか。ですから、『観経』の中で説かれているのは、私たちが差別の世界の中で生きていることの象徴ではないかと思っています。

発言した人の問題ということがあるかもしれませんが、阿闍世自身は「是施陀羅」という言葉で母親を殺すことを留まったわけですし、この言葉が通じたということですね。二人に通じただけではなくて、周りにいる人たちみんなにも通じる言葉だったのでしょう。まさしく娑婆というか、穢土ということを表現しているんだろうと思います。

ことについては、どうなのかというのは感じています。一回、何かで表現したいと思っています。

浜口 わかりました、今日はありがとうございました。この対談が、今後のあゆみの確かめとなると同時に、学習のきっかけになればとても有難いです。また「同関協」が二〇二三年慶讃法要もしくは二〇二四年発足五十周年を見据えて、具体的な提言をしていくための一助になればと思います。

『観経』の序分は、親子関係、家庭関係の問題ということでよく取り上げられますが、そういう問題が起こっている、起こってくる根っこの部分を明らかにしようとしているのではないのでしょうか。

浜口 それは、やっぱり時代を超えたものですよ。

青木 そうです。それは人間の本質です。

浜口 その当時だから通用したとか、そういう話ではないですね。

青木 そうです。だからこそ、『現代の聖典』に『観経』が用いられたのではないのでしょうか。

ただ、「施陀羅」の救いはどこにあるのかという問題は残ると思います。そこをどう読み解くか。『観経』自体ということもありますし、『観経』を解説した善導大師の『観経四帖疏』もあります。あとは、『観経』の意をうたった親鸞聖人の和讃もあ

ります。この和讃のほとんどが、『観経』の序分をもとに作られています。ですから、親鸞聖人にとって『観経』の序分は大事なんですよ。こういうことをみんなで共有するためには、更なるテキストが必要ですよ。難しいものではなく、なるべく短くて、簡潔にまとめたものがあるといいですね。

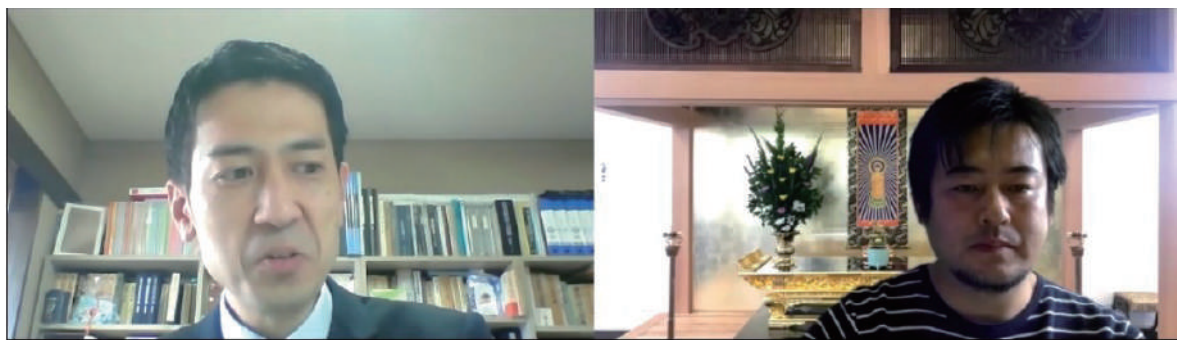
浜口 青木さんの中で、今後の取り組みというか、進めていきたいところをお聞かせください。

青木 発表や論文で『観経』『阿弥陀経』の注釈書のことを触れたので、その辺をもう少しと深めていきたいと思っています。

それと、「具縛の凡愚・屠沽の下類」ということです。文章でうまく表現できたかと言われると、そうでもありませんので……。一つ、自分の論文の中で言っていたのは、「具縛の凡愚」と「屠沽の下類」を必ずセットで言っていくということです。そこに「われら」という、親鸞聖人が表現し

対談 「是施陀羅」問題に向き合う

2021年2月27日 収録



九州大谷短期大学 准教授 青木 玲 さん × 浜口 和也 『同関協だより』編集委員



追悼

「同関協」会員であられた泉恵機さんが2021年4月17日に77歳で命終されました。
謹んでお悔やみ申し上げます。

泉恵機さんをお偲びして

一九九六年十一月二十八日に発行された『同関協の歩み―発足二十二年を省みて―』に寄稿されている泉恵機先生の文を読み返した。そこには、「水平社宣言」に「人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を勦ることが何であるかをよく知っている吾々」と言われるように、教団の差別性をもっともよく知っている人々こそ、大谷派の解放運動の核をになう人々ではないか。そうあってほしい。そういう願いと期待を、ずっと抱いている。

という、「同関協」に対する思いがしたためられている。さらに、「同関協」の生みの親の一人である朝野温知先生の「同関協」総会での提言を引き合いにして、朝野先生は、大谷派の運動、特に「同関協」の運動が、教団内発想、日本的発想を超えたものでなければならぬことを訴えておられる。具体的な活動としてはともかく、そういう視野が要請されるということであろう。

と「同関協」への切なる願いを語られている。二〇二〇年、真宗大谷派は新しい門首を迎え、その継承の挨拶にも「国家や民族、言語や習慣など、あらゆる

る差異^{ちがい}を超えて、生きとし生けるものが互いに響き合う世界が求められている」と述べられている通り、さらなる多様な在り方を前提とした視野が必要不可欠だ。

泉先生の生き方は、そんな多様性を重んじたご生涯だったのではないかと先生との思い出を振り返ると、ふと思う。中でも印象深いのは、先生が若くしてお寺の護持を任された頃、ある宗教団体の勧誘がお寺に訪れ、いわゆる道場破りを目的に來た際にも「まあ上がって茶でも飲んで行ってください」と、茶室に招いて談話をした話を聞かせて頂いた時の事だ。

先生は、私にも「そのくらいおおかでおらんとな」と、語りかけてくださった。その寛容さを抱きつつ、解放運動における先生の眼差しは鋭く、また決して差別を許さない厳しい面もあった。「中途半端な運動ではあかん。やるんやったら、とことんやらなあかんで」と発破をかけられたこともあった。

今、自身のあり様を見て、先生から教えていただいたこと、「同関協」に願われていたことが、どれだけ表現できているだろうか。中途半端で、遅々とした動きではない足元に、申し訳ない気持ちで一杯になる。

編集委員 浜口和也



気になる1冊

著者であるフランツ・ファノン^{フランク・ファノン}は、黒人のフランス人で、1925年に当時フランスの植民地であったカリブ海の小さな島であるフォール・ド・フランス（アンティル諸島）に生まれ、中流階級^{ちゅうりゅうかいきゅう}の家庭で育ちました。

白人と同じ教育を受け、肌の色は黒くても、「ニグロ」と呼ばれるアフリカの黒人や原住民たちと自分は違うのだと意識し、フランス文化の中で、本や映画に描かれている黒人（ニグロ）などの原住民は、野蛮で危険な存在であると認識し、ニグロ＝悪と思い込んで育ちました。

また、フランス人と同化するため、第二次世界大戦では、白人とともに軍隊に従軍し戦うのですが、白人の軍隊には入れてもらえず、凄まじい差別に遭い、自分とは違うと思っていた「ニグロ」と呼ばれる黒人と同等の扱いを受けたことに衝撃と憤りを感じました。そのことをきっかけに、差別の構造を精神分析の視点からとき明かそうと精神科医となり、「差別とは何か」「差別はなぜ行われるのか」、「差別をどう乗り越えていくのか」といった課題を精神分析や言語分析の立場から解明することに尽力します。

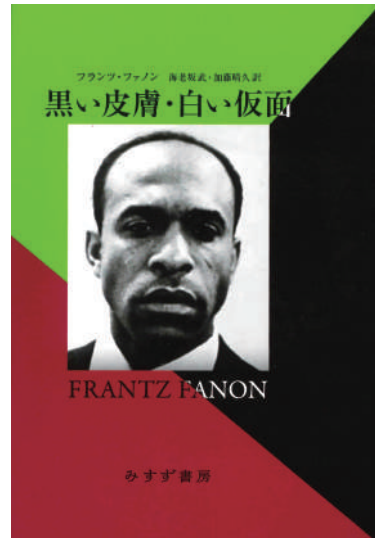
同じ差別を受け、痛みのわかるはずの被差別者の中でも、劣等感やコンプレックスから差別意識が育まれ内在するということにどう向き合えばよいのか、そんなことを考えさせられる本です。

本書は、白人社会の中で、差別意識を刷り込まれ、黒人自らが劣等感を抱く社会構造や差別が単に差別する側の意識の問題だけでなく、その差別の構造を受け入れ、その価値観に染まってしまう黒人の側の心理をも明らかにしていきます。

著者の「ニグロは存在しない。白人も同様に存在しない。」という言葉が印象的でした。どちらも人間であり、それを分け隔てているのは、私たち自身の意識であると。

著者自らの出自や経験を通して、差別者、被差別者が共に解放されていく、真の人間解放の道を模索する姿は、あらゆる差別問題に通じることと思います。

編集委員 治田裕臣



『黒い皮膚・白い仮面』
- 新装版 -
フランツ・ファノン 著
海老坂 武・加藤 晴久（訳）
みすず書房